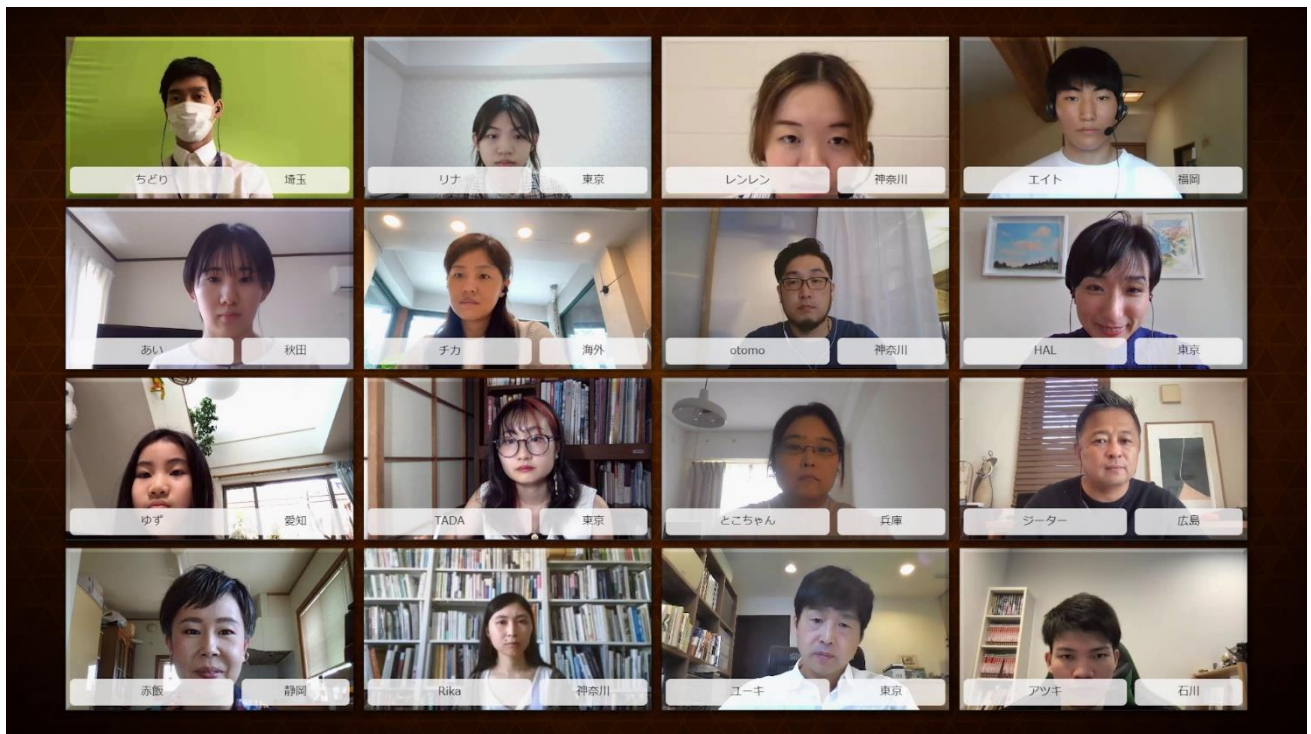


NHK アカデミア 第6回<建築家 妹島和世>



建築家
妹島和世

建築家 妹島和世さん「こんにちは。ご紹介いただきました妹島です。建築の設計をしています。今日は、いろんな方にこの講義に参加していただいていると聞いております。今まで自分がつくってきたいくつかのプロジェクトについての話をとおして、皆さまに、建築家というのはどんな職業でどんなことをやっているのか、どういうことを考えて何を目指しているのか、少しでもイメージをつかんでいただければと思います。もちろんいろんな建築家がいいますから、あくまでもこれは私の一例というふうにお考えいただければと思います」



<妹島和世にとって 建築家の仕事とは？>

妹島さん「私にとって建築家の仕事とは、この世の中に暮らす多様な人々が、違うということで切り分けられるのではなくて、どういう空間だったら一緒に快適に暮らせるのかということを考えることではないかと思います。そして、お互いを尊重しあいながら一緒に時間を過ごすことのできる空間をつくることだと思います。それは公園のような場所ではないかと思っています。公園には、老若男女いろんな年代の人がいて、例えばお母さんと子どもたちのグループがいたり、カップルがいたり、サラリーマンが仕事の途中でひと休みしていたり、それぞれがみんな思い思いに時間を過ごしています。みんなと一緒にいられる場所でもあり、ひとりでもくつろぐことができる場所です。今日は『公園のような場所』ということを中心に、5つのプロジェクトをご紹介します」

<公園のような建築 “みんな”と“ひとり”の両立>

再春館製薬 女子寮 熊本県 (1991年)

NHKACADEMIA



Photo: Tomio Chashi

Saishunkan Seiyaku Women's Dormitory, Kumamoto, 1991

妹島さん「最初にご紹介したいのは、私が設計を始めたごく初期に設計しました再春館製薬女子寮です。熊本県が1988年に取り組みを始めた、良質の都市計画や建築をつくって文化的資産をつくっていこうという『アートポリス運動』に、民間から参加した最初のプロジェクトです。

80人の女子新入社員が、研修を重ねながら1年間共同生活をする場所で、企業の寮でありながら学ぶ場所でもあり、80人が一緒に暮らす、いわば大きな家のようなものでした。最初に説明を会社の方からお聞きしたとき、『ここでみんなと一緒に暮らしたことがよかった。再春館製薬で働いた女の子をお嫁さんにもらったらすばらしかった』というふうな場所をつくりたいと。一緒に1年間暮らすわけですからなかなか大変で、どんな場所だったら『仕事』と『一緒に暮らす』ということができるのか、私たちがいちばん考えたことでした。一般的に会社の寮というのはワンルームマンションみたいなものが多かったですから、こういう機会に、80人一緒だから経験できる、ワンルームマンションでは絶対に経験できないスペース、80人で居心地よく一緒にいながら、ひとりでも居心地よくいられる空間というのはどんなものがあるのか、いろいろ考えました」

初期の設計案

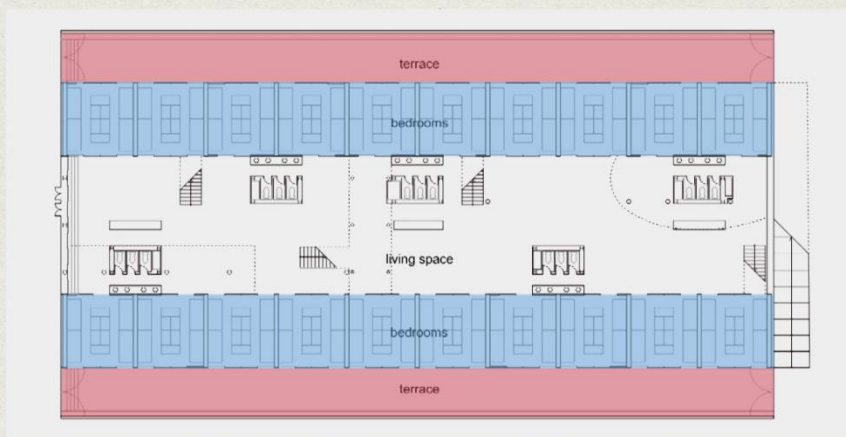
NHKACADEMIA



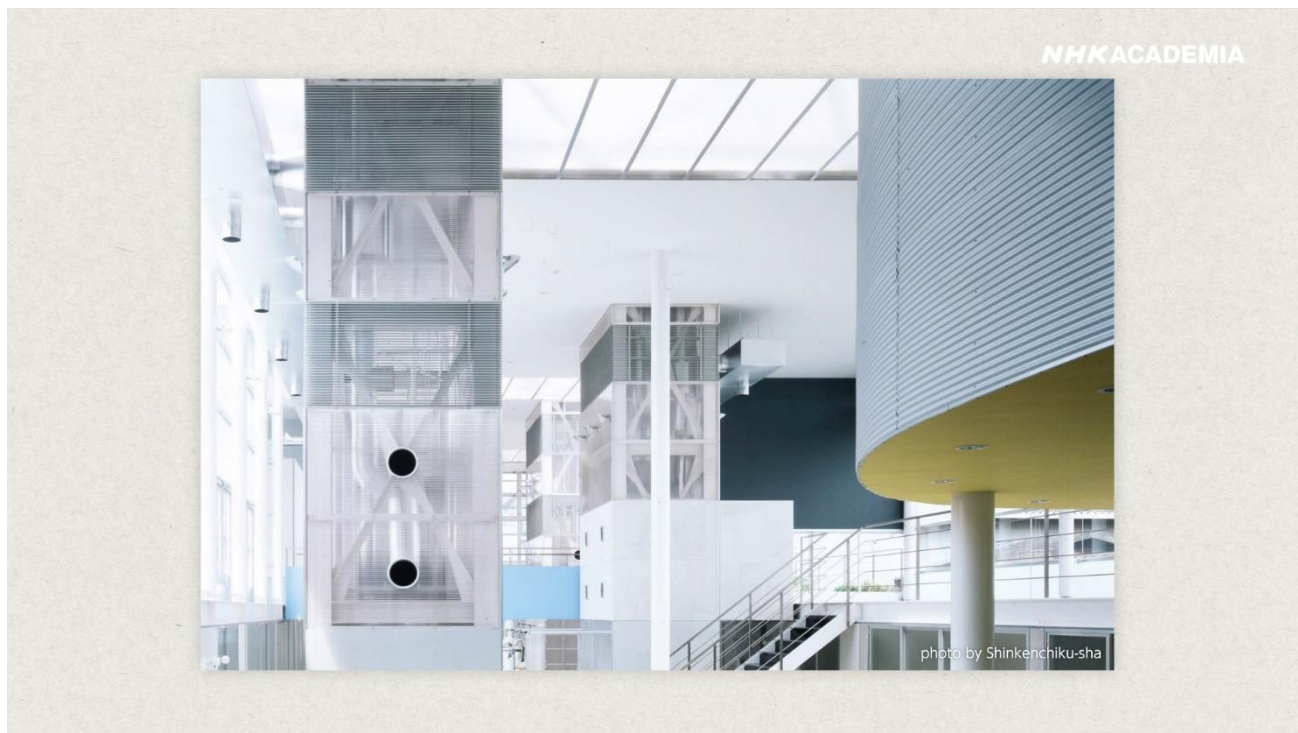
妹島さん「集まり方のいろんなタイプを考えて、このスケッチはいちばん極端なものなんですが、なるべくひとりひとり離れ離れになれるのはどうかと考えたのがこの案で、80人分のベッドを敷地全体に均等にちりばめたんですね。そうすると、ひとりひとりができるだけ離れられる。その代わり2階に上がると、みんなで使う大きな部屋がいくつかあって、それが空間の中に浮いている。ただ、これはクライアントの方に『入院しているみたいじゃないか』と言われて、実現しませんでした」

最終的な平面図 (1階部分)

NHKACADEMIA



妹島さん「これが最終的に実現した 1 階の平面図なんですけれども、両側にテラスがあって、そのテラスに向かって寝室をとる。そこが 4 人部屋でコンパクトになっている代わりに、真ん中のがらんとした通りみたいなところが、みんなのリビングルームというふうに設定しました。そこは、光と風が入ってくる半屋外のような明るくて大きな空間で、みんなで集まることもできるし、みんなから離れることもできる。室内空間としてプレッシャーがなくて、光や風を感じながら思い思いでもくつろげるんじゃないかと思って、こういうプランをつくりました。これは公園のような自由さを持つ場所ではないかなというふうに、そのとき考えていました」



妹島さん「これは真ん中のみんなのリビングルームを見上げた写真ですが、大体室内空間は 18m の幅で 45m の長さがあります。タワーが見えると思うんですけど、構造のタワーになっていまして、これで全体を支えて、その 5 本はそれぞれ設備のコアにもなっています」



妹島さん「上の方には空調機と換気設備が入っていて、下にトイレが入っています。その5本にばらばらにトイレがありまして、人がいないところとか、行きたいところのトイレに行けるし、ちょっとこの写真で見えると思うんですけども、陰に洗面所が5か所、散らばっているというふうなことです。

床は舗石ブロックで仕上げまして、より公園のような半屋外みたいな感じを味わえるような空間にしようと思いました」



photo by ShinkenchiKU-sha



妹島さん「突きあたりはガラスと金属スクリーンで、外からは見えないんですけど内側からは外の通りが見えるようになっています。床のレベルは、外の地面より少し下げて落ち着ける空間にしました」

梅林の家 東京都 (2003年)



Photo: Takashi Homma

House in a Plum Grove, Tokyo, 2003

妹島さん「その次に、5人家族のための70平米、20坪くらいですね、そんなに大きくない専用住宅を都内につくりました。このように梅の木に囲まれています」

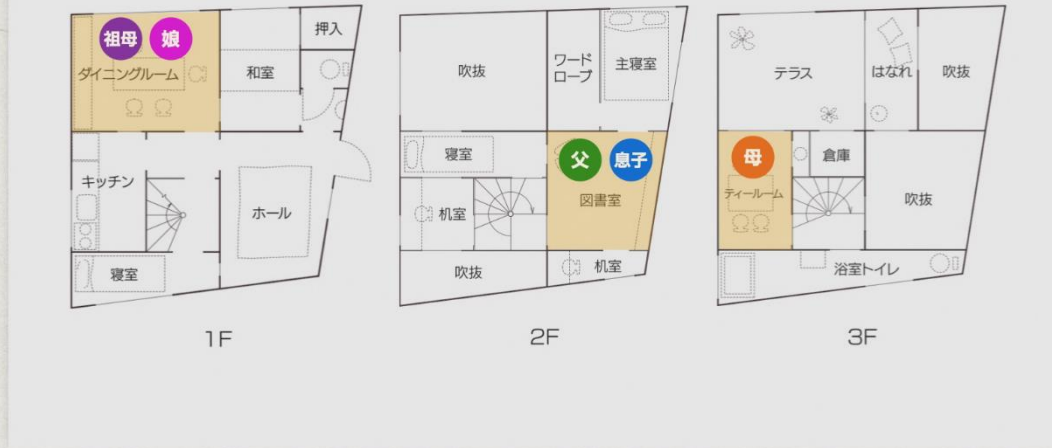


妹島さん「これがもともとの敷地の写真です。設計するときに、まずクライアントの方に『梅がきれいなので見に来てください』と案内されたときの最初の写真です。そのときに『周りの人もみんな、毎年この梅が咲くのを楽しみにしているので、梅を残してください』と言われたんですね。そうは言ってもそんなに大きくない土地だし、どういうふうに住てるのかなと思ったし、私としても建ぺい率いっぱいに住てるのが当然だと思っていたので、クライアントの方からそういう話を聞いたときは本当に驚きました。

普通は『自分の家は何畳と何畳があって、こういう場所がほしい』というようなことから組み立てていくことが多いんですが、この方の話を聞いて『家というのは、地域と共にあるということなんだ』ということ、逆に教えられたというような経験を持ちました」

梅林の家 平面図

NHKACADEMIA



妹島さん「もう一つそのときに言われたのが、ここはご夫婦と子どもさん2人とおばあさんと5人で暮らされるおうちなんですけど、『みんなで一緒にワンルームで暮らしたい』と言われてまして…建築をやっているとワンルームと言ったら、工場みたいに大きなものであれば5人がばらばらに暮らせばいいだろうと思うんですけど、どうやってここに暮らすのかなというふうに思っていたら、『立体的なワンルームはできないのか』と言われました。そんなことを考えたことがなかったなと始まったのが、この家なんです。

これは、この家の平面図です(上写真)。立体的に小さな部屋が組み上がって、みんな薄い鉄板でつくられています。その薄い鉄板というのがこの建物の構造になっています。5人家族なので、本当は7、8部屋あれば、5つのベッドルームとリビング・ダイニング・キッチンとお風呂ができるんですけど、ここでは20坪強の敷地に小さな部屋を20室ぐらいつくりました。

そうすると、普通の住宅だと自分の部屋かリビングかどちらかの選択になるわけですけども、ここではダイニングにおばあさんとお嬢さんがいたとしたら、上のティールームにお母さんがひとりでいたり、また読書室にお父さんと息子さんがいたり、いろんな形で集まったり離れたりできる。そして、自分のものをベッドルームにしまって、みんなのものはリビングにしまってというのではなくて、いろんな形で並べ替えられるという家になりました」

鉄板の壁を工場で作作

NHKACADEMIA



妹島さん「これは工場で作っているところですが、壁は 16mm の鉄板でできています。穴が空いた鉄板の部品が作られて、現場でつながれて家が出来上がりました。鉄板に大きな穴が空いていて、部屋から部屋へ人が通り抜けられるようになっているので、各部屋は独立しながらもつながっている家です」

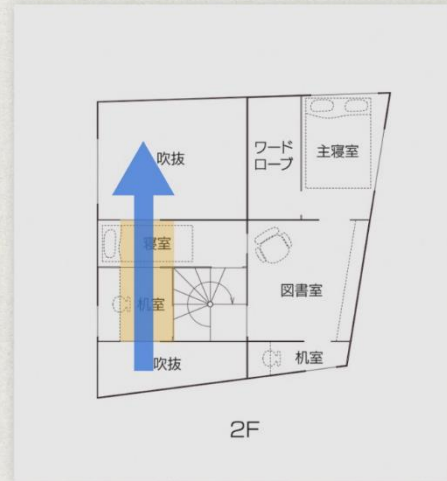
NHKACADEMIA



妹島さん「これはベッドの部屋ですね。右上に、お姉さんの勉強部屋の窓が見えます」

娘の部屋

NHK ACADEMIA



妹島さん「これが、お姉さんの勉強部屋です。外に向かっている本当の窓は一つですが、向かって右横にも窓があって、その先にベッドの部屋があって、さらにその先にダイニングの上部が見えて、その先にダイニングルームの高いところに付いている本当の窓が見えます。小さな部屋でもいろんなところに開口があって外が見えて、壁の奥行きがないので、隣りが見えても横にポスターが貼ってあるというような感じです。だから、みんなで一つの家を共有しながら、集まったり離れたたりできる家かなというふうに思います。そして、住まいながら、この家族の方たちがいろんなことをつくってくださいました」



妹島さん「これはテラスですけど、隣りが遊園地なんです。その空間を共有するようなテラスとなりました。

ここまで私がお話しした企業の寮や個人の住宅というのは、人がどんなふうに集合するのかということを考えていたと思います」



妹島さん「でもだんだん家だけの問題ではないなというふうに思えてきました。今自分で作り始めてからちょうど35年ぐらい時間がたっているんですけど、私のキャリアのちょうど中ごろに取り組んだのが、今日来ております『金沢21世紀美術館』です。それまでと比べると一挙に規模が大きくなりました。てんやわんやしながらつくりました。この金沢21世紀美術館というのはプロポーザルコンペから始まりまして、『ふだん着でも来られる美術館』というのが、市の考え方でした。

敷地は金沢市役所の横ですし、兼六園のふもとという非常に街の重要なところにあり、いろいろな人が周りからやってくる場所でした。『公園のような美術館』というアイデアが出て、いろいろな人が気軽に立ち寄ったり、思い思いの時間を過ごしたりすることができる場所にしたいと考えました」

設計検討のための模型

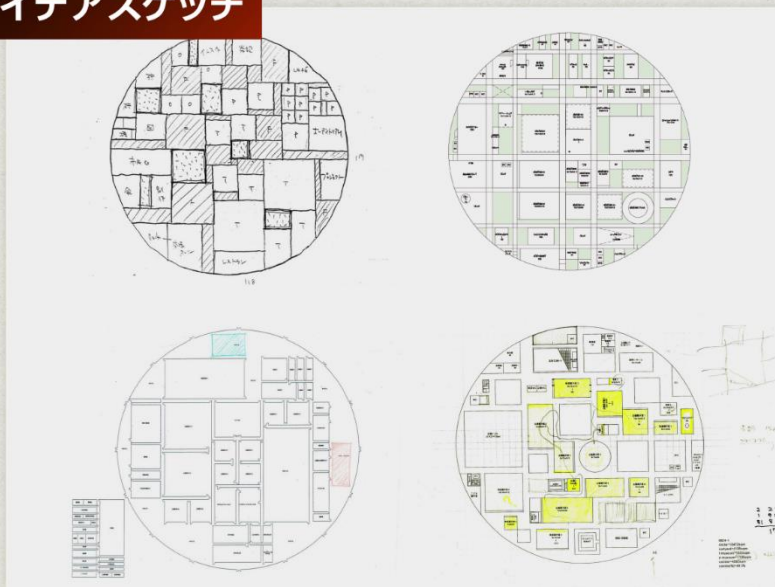
NHK ACADEMIA



妹島さん「これは事務所での検討のための模型ですけれども、『美術館』と『交流館』の二つがばらばらだったら簡単だったんですが、違う機能を一つに入れたので、どうやってこの二つを一緒にしたらいいかというのを延々と検討しました」

平面図のアイデアスケッチ

NHK ACADEMIA



妹島さん「それに対して平面図のスケッチがあるんですけど、展示室と廊下と交流スペースをどんなふうに混ぜ合わせたり離したりするかとか、バックスペースの配線とか…そんな検討をしていたときの

ものです」



金沢 21 世紀美術館 長谷川祐子館長「たくさん印象に残ることはあったんですけども、やはりいちばん最初のプロポーザルで、美術館という静かな場所とにぎわいの場所を一つにされたところが、非常に印象的でした。街の中の中心になるイメージということで、中心から街の周辺に向かって広がっていくような、そういうイメージを共有することができたと思います」



長谷川さん「いちばん大事に思ったことは、『来る人がきれいに見える』ということだったんです。美術館では、作品がきれいに見えるということをまず言いますが、私たちは作品もそうだけれども、いらしている方たちが、外にいても中にいてもきれいに見えるということをととても大事に思ったんですね。写メとかインスタグラムとか無かった時代なんですけれども、ここでいかにきれいに写るかというのはすごく大事。それを思い出として持って帰れるかということがすごく大事だと思っていました。だから外にいろいろなパブリックアートがあって、中にもあるんですけれども、それを体験していただきながら、中と外の人たちが視線を交わしたりすることによって、『本当にあの人たちは楽しそうにしているな。アートと一緒にいるな』という感覚を共感してもらえる、そういう心理的な効果を考えたと思います」



長谷川さん「特別感というのは、やはり一つ一つの部屋が独立していて、多様性を包括していること。ひとりひとりが違っていてもいいんだということのメッセージになっている気がします。あとは、パブリックスペースがすごく広いので、作品を見たあとで一回外に出て、中庭の光がありますよね。そのことによって自分の体験がリセットされて、またフレッシュな気持ちで次の部屋に入っていける。そうすると自分にとって本当に大事な思い出だけがきれいに残るんです。だから人生においてそんなにたくさん作品を見たり展覧会を見たりする必要はないんですけども、本当の出会いというのはすごく必要で、そのことを大事にしている美術館だと思います。だからここに来ると、すごくリフレッシュするというか、光がやわらかく入っていて、隣で感じている誰かと、思いというのがやわらかく伝わってくる」



長谷川さん「『公園のような美術館』というのも妹島さんがおっしゃったことなんですけれども、それは
どういうことかという、パブリックとプライベートと一緒にそこにあって、でもプライベートな空間
がちゃんと維持されている。だから公園はひとりひとりがそれぞれ違うたたずまいでいるけれども、み
んながそこにいることをなんとなく共有していますよね。それで一つの安心感とかたたずまいが生まれ
る。周りをガラスで囲われていますよね。見えすぎないということも大事で、この中に迷路のようにいろ
んな建物が、小さいギャラリーがあるということもそうですし、人々の動きが見え隠れしていくとい
うこともあったと思います」

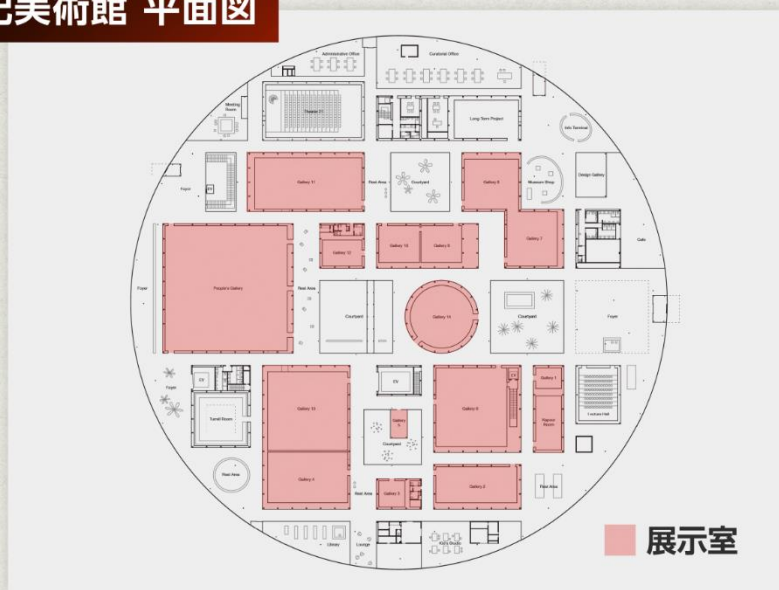


長谷川さん「街のように一本アクセスとしてつながっていて、例えば、入口から見たときに、市役所の壁が見えるみたいな、そういうふうな突き抜けている場所もあります。そういう意味で、この美術館そのものが一つの街のような感じになっています。街の中に美術館が含み込まれる、美術館が外の街に響き合っていく。そういうことが公園のような美術館体験と合っていると思います。

妹島さんはすごく才能のある方で、私は『天才』と呼んでいるんですけども、建築家というよりもむしろアーティストとしても大変尊敬しています。絶えずこちらが考えてもいなかった領域に向かって、いろんなアイデアを展開されるすばらしい直感力と想像力を持った方だと思います。同時に、その想像力に向かって、一緒に伴走していくのもかなり大変だということもお伝えしておきます」

金沢21世紀美術館 平面図

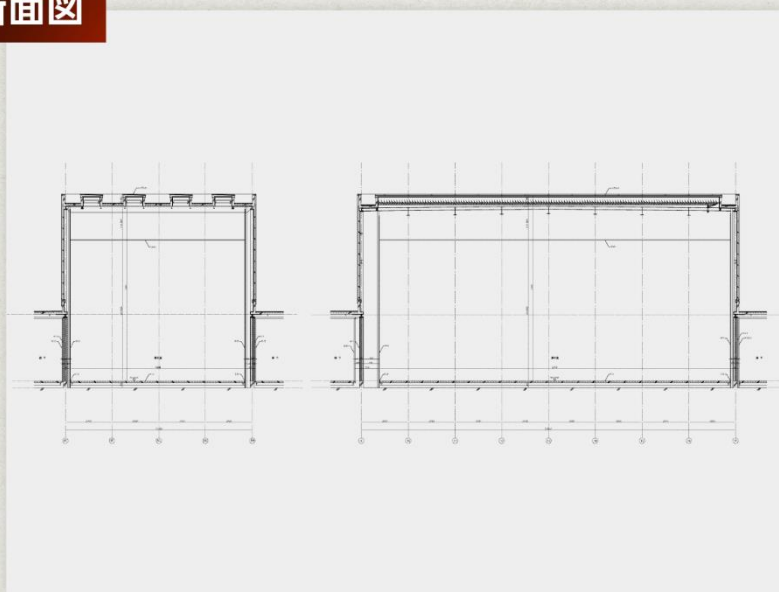
NHKACADEMIA



妹島さん「長谷川さんの話がいろいろありましたけれど、こちらが金沢21世紀美術館の平面図です。いろんなものをつくった結果、キュレーターのチームの人と、それから金沢市のプロジェクトチームの方と侃々諤々(かんかんがくがく)しながら最終的にできあがったのが、このプランです。展示室と展示室の間に隙間があって道のようになっていて、人々が展示室から展示室に自由に巡ることができるようになっています。この中を歩いていただきますと、街を歩いているように感じることができますし、開放感があります」

展示室の断面図

NHK ACADEMIA

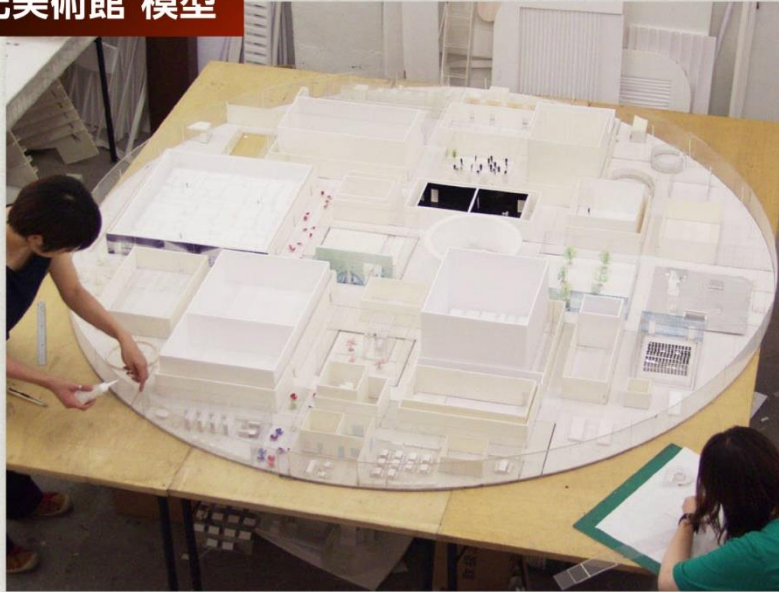


妹島さん「これは展示室の断面図ですけれども、みんなが身近に近づけるようにということで、全体は低い建物になっているんですが、展示室は展示のために高さがとられていて、高く飛び出しています。

そして、室内環境についても、シミュレーションで温度分布とか風の流れによって省エネルギーをどういうふうにしたらいいかということを検討しました。今日はあまりそんな話はしていないんですけれども、建築というのは、いろんなエンジニアの人とコラボレーションしながら形づくっていきます」

金沢21世紀美術館 模型

NHK ACADEMIA



妹島さん「これは実施設計に使った大きな模型で、私たちの場合は、最初は小さな模型でいろんな案を考えますが、最後に大きな模型をつかって、切ったり貼ったりしながら、より具体的な検討を進めていきます」

NHK ACADEMIA

プリツカー賞受賞につながった代表作



妹島さん「そしてこれが完成した外観です。大きな建物なんですけれども、4m程に抑えた高さで、どこから人もスムーズに入りやすいスケールと顔を持っていて、そこから展示室が飛び出しています」

金沢21世紀美術館 光庭

NHK ACADEMIA



Photo: Walter Niedermayr

妹島さん「光庭のいくつかはアートを表示する場所にもなっていて、展示室と展示室の間からは街が見えます」

アーティストによる展示の様子

NHK ACADEMIA



Celebrating SANAA's Pritzker Prize: Ensemble for Sound & Architecture, September 15, 2010, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
Courtesy: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

妹島さん「これは展示室の様子ですけど、例えばこれは音楽演奏が展示になったもので、演奏者と聴衆が一緒にいて、その風景が展示となっています。移動しながら自分でその人なりの音楽が組み立てられ

ていくようなプロジェクトです」



妹島さん「これはアーティストの日比野克彦さんがワークショップでつくられた『明後日朝顔プロジェクト 21』なのですが、春に子どもたちが植えたアサガオが、夏になって建物の外観を 360 度覆うようになって、そして育ったアサガオが日陰をつくって軒下のような空間が現れました。私たちがつくった空間はどんなに透明であってもガラスが感じられるんですけども、アサガオの影によって本当にガラスが消えてしまって、全く違う空間が生み出されて大変驚いたことをよく覚えています」

美術館周辺のギャラリー分布図

NHKACADEMIA



妹島さん「これは私もすごくうれしかったんですけど、美術館と街の関係を示す地図で、街で自分のギャラリーを運営されている方が、『自分のギャラリーはもしかしたら金沢 21 世紀美術館の展示室が一つ街に飛び出したと考えられるんじゃないか』というイメージを思いついてくださったんです。それから街と美術館が本当につながったというような気がしました。この美術館は、街を見ながら展示室を移動するイメージと申し上げたんですが、本当に街の中に入って行って、いろんな展開が生まれています」

10周年記念パビリオン

NHKACADEMIA



妹島さん「ここまで時間がたって、設計を始めたころには考えられなかったことを、いろいろと感じるようになってきました。建築というのは物理的に動かないものなので、この美術館をつくる時も、どうやったらアーティストの人に使いやすくなるんだろうということをすごく悩んだりもしたんですけれども、いろんなことが有機的に関係を持って変わっていくということを経験しました。

若いときはどちらかというと、建物の完成がゴールで、それをいちばん目指してやっていたような気がするんですけれども、この金沢の経験をとおして、時間とともにどんどんつくり続けられていくというか、いろんなことを考えられるようになったかなというふうに思います」



金沢21世紀美術館 レクチャーホール

妹島さん「今日せっかく美術館に来ているので、少しだけ美術館をご紹介できたらと思います。このレクチャーホールもこのようにガラス張りにするかどうか、設計時は侃々諤々(かんかんがくがく)だったんですけれども、大きなホールが一つ向こうにあって、ここはアーティストトークとか展覧会の最初の説明とか、そういうことに使うので、やはりこの周りの環境があった方がいいだろうということで、こういうものが出来上がりました。オープニングのときも、最初はカーテンを閉めたんですけれども、やっぱり開いた方が気持ちいいということで、途中でカーテンを開けました」



妹島さん「レクチャーホールから外に出ると音がしてきます。光庭です。先程ご説明しましたとおり、周りを街に囲まれていて、何本も道があって、展示室と展示室を移動するときには、いろんな風景が見えます。建物が丸い形なので、長い道があったり、短くてすぐ端と端が見えてしまうような道があったり…そんな体験をしながらこの中を回れます。私としては、何度か来るうちに自分でいろんなことを発見していけるような美術館がいいんじゃないかと思って…そうすることによって、与えられたところに来るといよりは、どんどん自分の美術館をつくり上げていける、そういうものになったらいいなと思ってこういう設計にしています。今日もたくさんの方が来てくださっていて、一緒に美術館をつくってくれているという感じがします」

茨城県日立市

NHK ACADEMIA

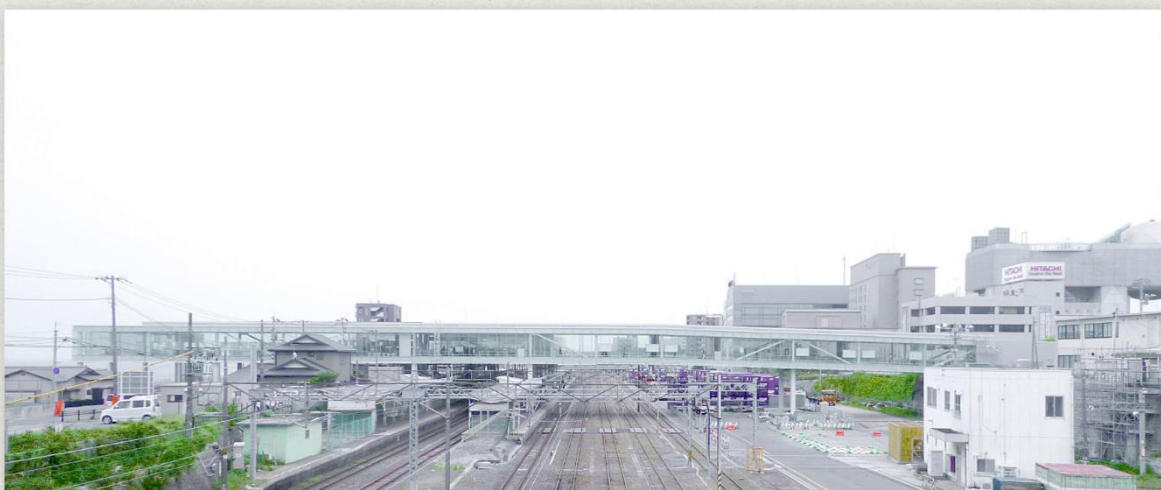


Hitachi City

妹島さん「続いて、もう一つのプロジェクト、日立のプロジェクトです。日立市というのはこの写真でもちょっと分かると思うんですけど、山と海に挟まれた街で、山から海に向かって地形が下がっていくんですね。日立は私の故郷なので、日立とのつながりっていうことは、このプロジェクトに関係しているかなというふうに思っています」

日立駅 茨城県 (2011年)

NHK ACADEMIA



Hitachi Station, Ibaraki, 2011

妹島さん「これは日立駅なんですけれども、山から海に向かってきて、そこをつなぐような形で駅があります。高校生のときに毎朝駅を使っていたんですが、当時は駅から海が見えなかったんです。いろんなところから海が見えるけれど駅で海が見えないということを、不思議にも思っていなかったんですが、ある朝プラットフォームで潮の香りを感じて、海が駅のすぐ近くにあるんだということに気づかされた。そのときから駅からも海が見えたらいいのにといい思いを持っていました」



妹島さん「あるときプロポーザルがありましてそれに参加して、海が見えるということがいちばんの日立らしさだと求められたときに提案したのがこの案です。街と海を分けるようにあった駅を、今度はつなげるんだというような提案です。やっぱり駅というのは、日立を訪れた人が最初に到着する場所なので、海と山という日立の街の地形や自然が感じられる場所になるといいなと思いました」

日立駅 茨城県 (2011年)

NHK ACADEMIA



妹島さん「これが街側からずっと海の方に向かってきているブリッジです。このブリッジは自由通路になっていて、誰でも通ることができる道です」

日立駅 茨城県 (2011年)

NHK ACADEMIA



妹島さん「その道のいちばん突端に、海に出会う場所があります。太平洋をパノラマ状に見渡すことができます。水平線の広がりを見ていると地球が丸いんだということを、本当に感じることができます。その

日の天候や時間によって、さまざまに海は表情を変えて、海と空が一体になって見えることもあります。私も常磐線で日立に行くんですが、「今日はどんな海が見えるか」というのがいつも楽しみで、本当に毎回違うんです。驚きながら写真を撮るということを毎回経験しています」



妹島さん「これは日の出のときの写真ですけど、だんだんここは名所のようにになって、いろんな方がこのすばらしい写真をアップしてくれて、一つの日立のすばらしさというのをくり上げていっている…そういう気がします」

日立市役所 茨城県 (2019年)

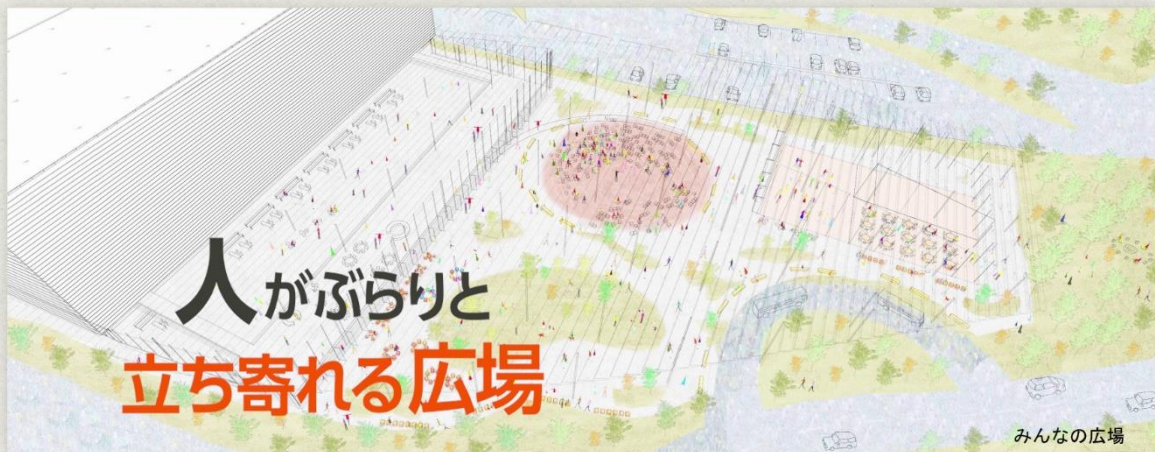
NHKACADEMIA



妹島さん「こちらは、駅が完成したあとに始まった日立市の市役所なんですが、前に大きな屋根付き広場を配して、街の人々が集まることができる市役所というのを提案しました」

日立市役所前 アイデアスケッチ

NHKACADEMIA



妹島さん「プロポーザルのときに描いたアイデアスケッチです。『みんなの広場』というのを提案しています。市役所が用事のあるときだけ来る場所ではなくて、いつでもぶらりと立ち寄ることができる、街の

中心の一つになるといいのではないかと考えて提案しました」

日上市役所前 みんなの広場

NHKACADEMIA



妹島さん「大きな屋根の一部に穴を開けて、上から光が入ります。みんなの広場は、街の風景とともにあって、いろんなイベントがここで行われています。

みんながどう一緒にいられるかということを考えるうちに、最初は80人の家(再春館製薬女子寮)から始まり、徐々に大きくなって美術館や駅や市役所になったわけですが、市役所もある意味では市民の家であるとよいのではないかと考えます。『家』というのは自分がよそ者ではなくて当事者として関わることができる場所というふうなイメージです。

ひとりひとりが自分も『社会をつくっていくメンバー』だと感じられる空間。みんなが共につくり上げていく空間。そういう場所を、建築が示せるとよいのではないかと考えています」



<世界各地で進む新プロジェクト いま、建築に思うこと>

新香川県立体育館 香川県

NHKACADEMIA



New Kagawa Prefectural Sports Arena, Kagawa, 2018~

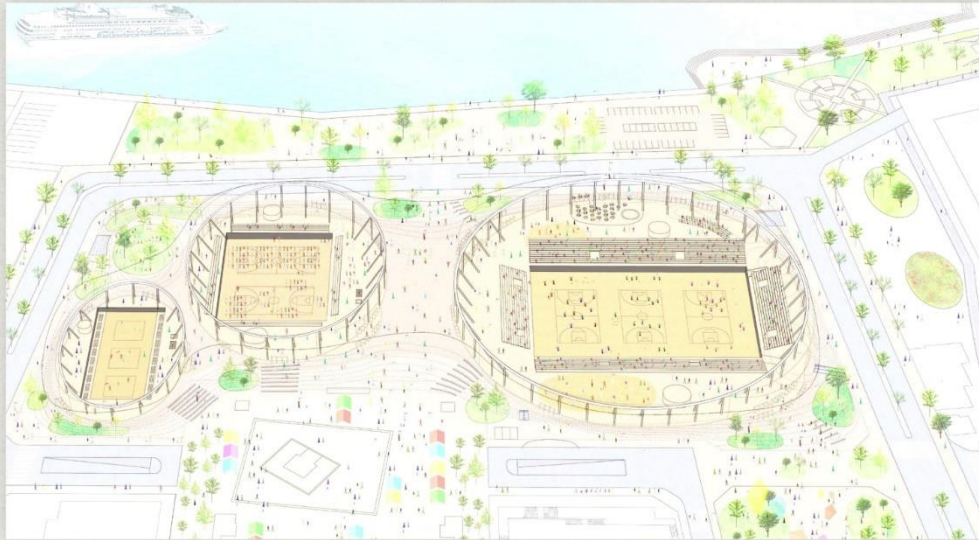
瀬戸内海に面した場所に完成予定の香川県立体育館
2022年春工事が始まる

妹島さん「続いて今やっているものを三つほど、簡単にご説明します。これは日本の香川でつくっている新県立体育館なんですが、瀬戸内海に面した敷地で高松駅から 100m くらいしか離れていない体育館な

んです」

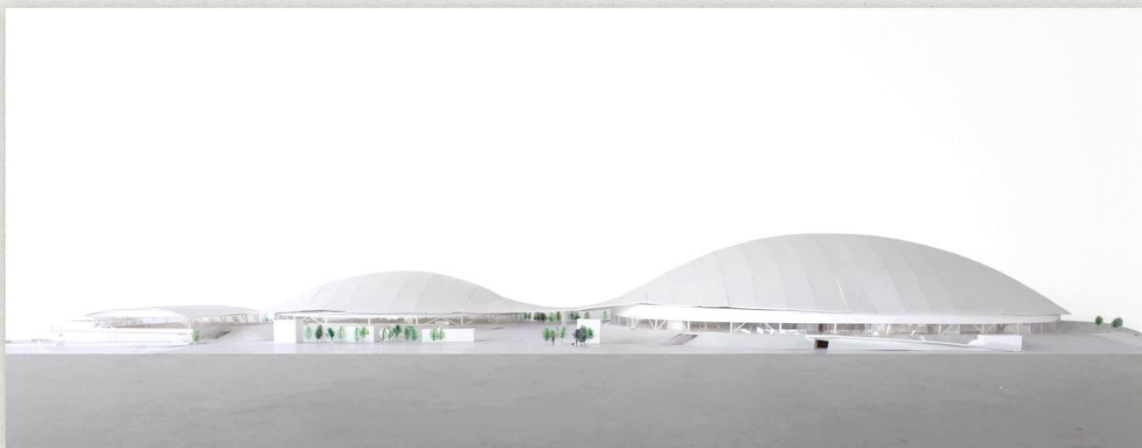
新香川県立体育館 香川県

NHKACADEMIA



妹島さん「これが最初に描いたコンペのときのスケッチなんですけれど、1万人規模が入る大体育館と中体育館とそれから武道場その三つが、今ある広場を囲うような形であつたらいいなということを思いました。アリーナレベルの1階は全部三つがつながっているし、半階上がった客席レベルは三つがバラバラになって、屋根はつながっていて、その下を通って向こうの瀬戸内海に出られる」

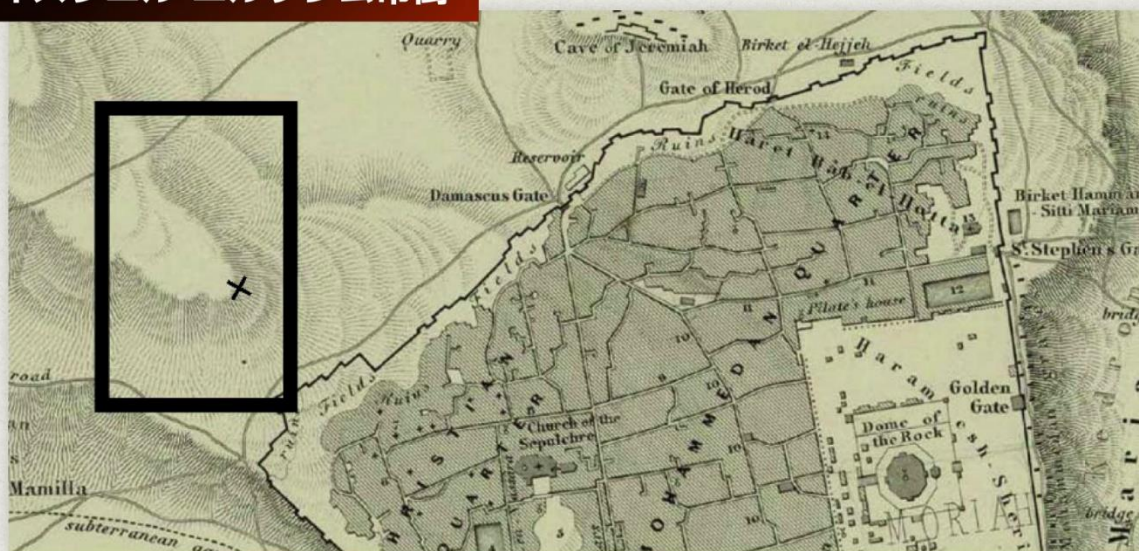
NHKACADEMIA



妹島さん「屋根は三つあって、1階はつながっていて、中2階みたいところが、向こうの海側とこちらの広場側をつないでいる。この三つの体育館が広場を囲うような形で、さらに新しい広場をつくるというものです」

イスラエル エルサレム市街

NHKACADEMIA



Bezael Academy of Arts and Design, Bezael, 2011~

イスラエル エルサレム市街

NHKACADEMIA

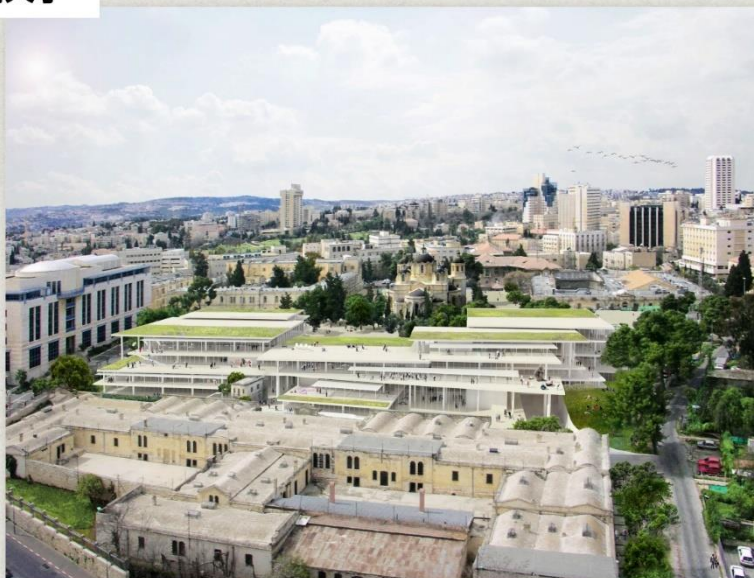


妹島さん「これはイスラエルのエルサレムでつくっている美術学校なんですが、黒いところが旧市街で、

旧市街のすぐ横に敷地があります。ここは、昔のろう屋とそれから市役所とロシア正教会と…いろいろあってちょっと難しい場所なんですけれど、そこに何をつくるかっていうので、美術大学だったらいろんな交流がスムーズに起こるんじゃないかということになりまして、市内にあって大きくなったから一回郊外に出ていたベツアルエルという大学が、もう一回市内の旧都市近くに建てられるということで始まりました」

イスラエル 美術大学

NHK ACADEMIA



妹島さん「これが最初のまとまったパースなんですけれど、手前の平べったいのがろう屋美術館で、左が市役所で、後ろにロシア正教会が見えているんです。

美術の中にいろんな学科があるので、全体で一つの交流が起こるようにいろんなプラットフォームがあって、そこをスロープとか階段がつないでいって、全部が混じり合うような大学になったらいいなっていうふうに思って今つくっています。これは遅れながらも、今年中に出来上がる予定で進んでいます」



妹島さん「このエルサレムで面白いのは、どの建物もこの土地のライムストーンという石で、壁の70～75%をつくっているんですね。そうやって街の建物が全部同じ石でつくられるので、これがずっと続いたら、建築も街の石というか地盤と一緒になる。私たちの建物だけ非常に水平的なものだから、壁じゃなくて床を全部そのライムストーンにшинаさいと、それで壁がちょっと少ないので、そこを薄いガラスにして石とそれからパウダーを入れたクリーム色のコンクリートでつくる。ほとんどみんな同じような色で建築が出来上がって、それが街をどんどんつくっていくというようになっています」

オーストラリア シドニー



シドニー・モダン・プロジェクト (オーストラリア)

NHK ACADEMIA

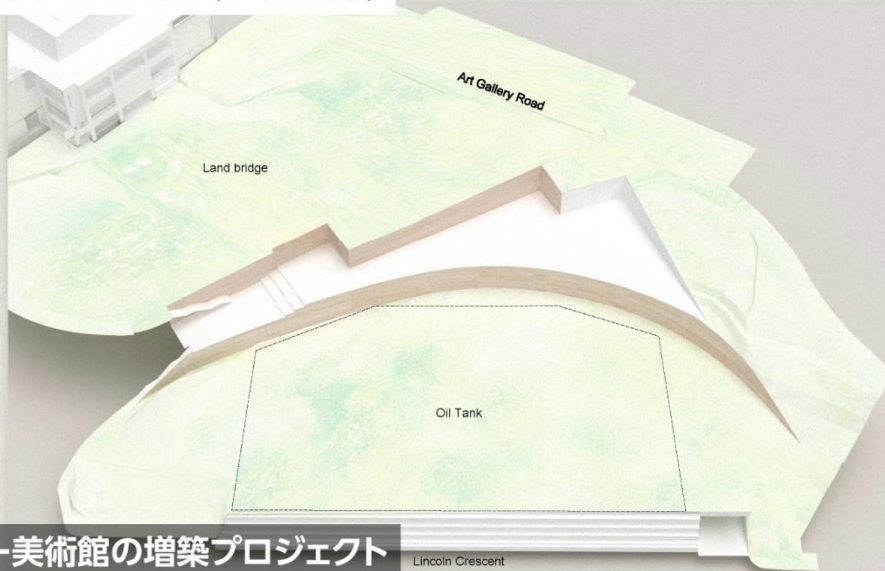


シドニー美術館の増築プロジェクト
22年末に完成予定

妹島さん「最後に、今年末(2022年)にできるシドニーの州立美術館の増築プロジェクトです。ちょっと見えるんですけど、右奥にシドニーのオペラハウスがあって、オペラハウスの後ろにずっとボタニカルガーデンがあって、その真ん中あたりに高速道路があって、その高速道路の上に見えるのが州立美術館です。高速道路の上がランドブリッジという橋なんです。で、その下にオイルタンクがあります」

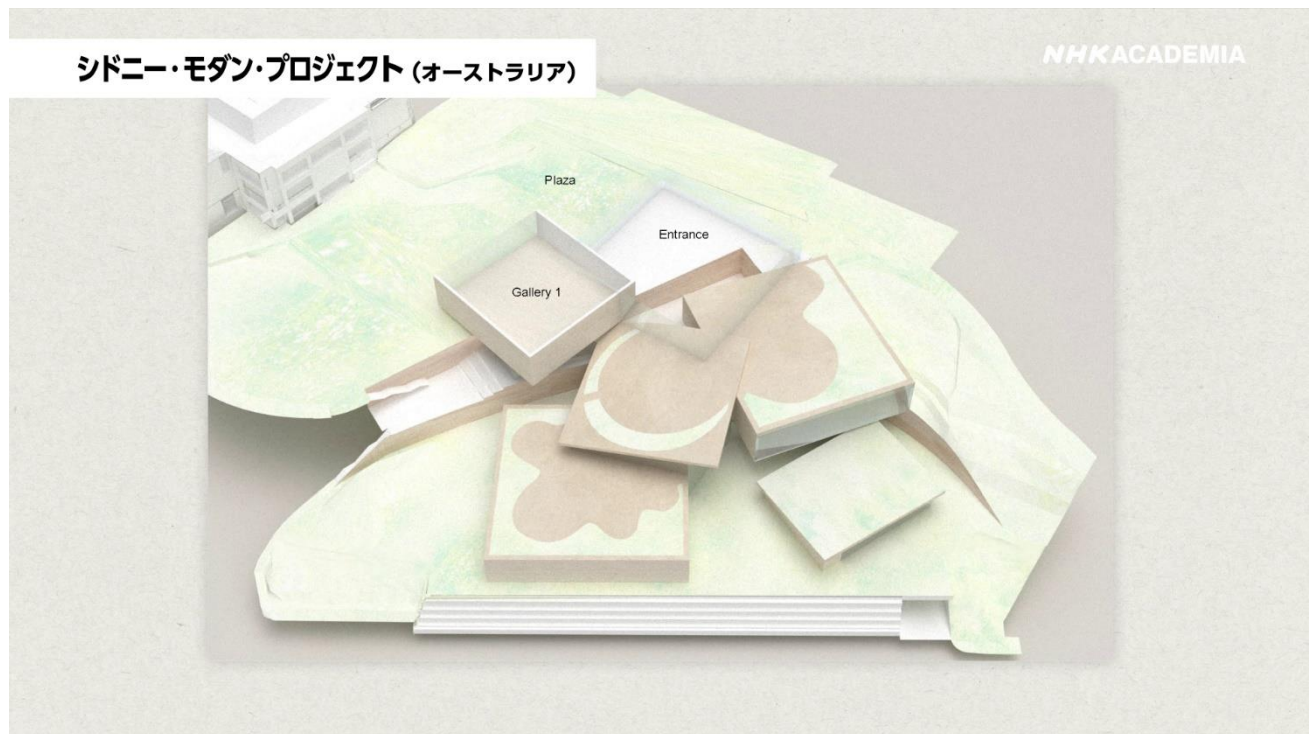
シドニー・モダン・プロジェクト (オーストラリア)

NHK ACADEMIA



シドニー美術館の増築プロジェクト
22年末に完成予定

妹島さん「これは模型なんですけれども、ランドブリッジというのは高速道路の上で、オイルタンクというのとはもともとここまで海があった…コンペのときにここに建てると。つまり土地がなくて、橋の上とオイルタンクの上、ここにどうやってつくるのかなというようにことから始まりました」



妹島さん「間にちょっと壁が入っていて、下の街から上の街に上がっていく人が、ここを歩いていくんですけど、そこに一つずつオイルタンクも美術館ギャラリーにして、オイルタンクの上にも一つ置いて、その間に一つ置いて、ランドブリッジの一つ置いて…レベル差が 20m ぐらいあるんですけど、そこに順々に置いていきました」

シドニー・モダン・プロジェクト (オーストラリア)

NHK ACADEMIA



妹島さん「そうするとこういうふうに展示室がいちばん上にあって、ランドブリッジからオイルタンクまでずっとその隙間を歩いていける。展示室の上は公園みたいにして、周りのボタニカルガーデンにつながって、散歩道のようになる」

シドニー・モダン・プロジェクト (オーストラリア)

NHK ACADEMIA



妹島さん「1階のレベルでエントランスがあってその横にまず一つ目のギャラリーがあって、そこからずんずん下りていくと2個目、その下に3つ目、その下が4つ目というふうになっていて、隙間をずっと

下りながら海の方に近づいていけるんです。道にあった土を壁に入れ込んでつくっています。外側は庭のようになっていて、ずっと周回していけるようになってます」



妹島さん「これが最後の写真ですけども、すぐ後ろがボタニカルガーデンで、シドニーの都市になっています。これが今やっていて、この2つは今年の末に出来上がります」



妹島さん「今日の話で何か伝わっていればうれしいですけど、私としてはやっぱりいろんな人がいて、街ってというのは人が集まってくるからできる。そのときに、みんな同じじゃないと一緒にやれないというんじゃないって、いろんな人がいるんだけど、それぞれが尊重されて、違う人がどうやって一緒にやるかというのをみんなで考える必要があると思うのが一つ。みんなひとりひとりが主役って言ったらかしいんだけど、みんなが自分の暮らす街だったり、社会だったりというのをつくっていく。

建築のコンペで『ユーザー』とかと表現するんだけど、その言い方はおかしいなと思って。使う人じゃなくて主役だと。そういう人たちが自分たちのものを自分たちでこんなふうにしたいと。当然、いろんな専門の人がいるから、そういう専門の人の力は必要。だけどそういう人たちと一緒に考えてつくっていく。そういうことができる場所を、建築で用意できたらいいなというふうに思っています」

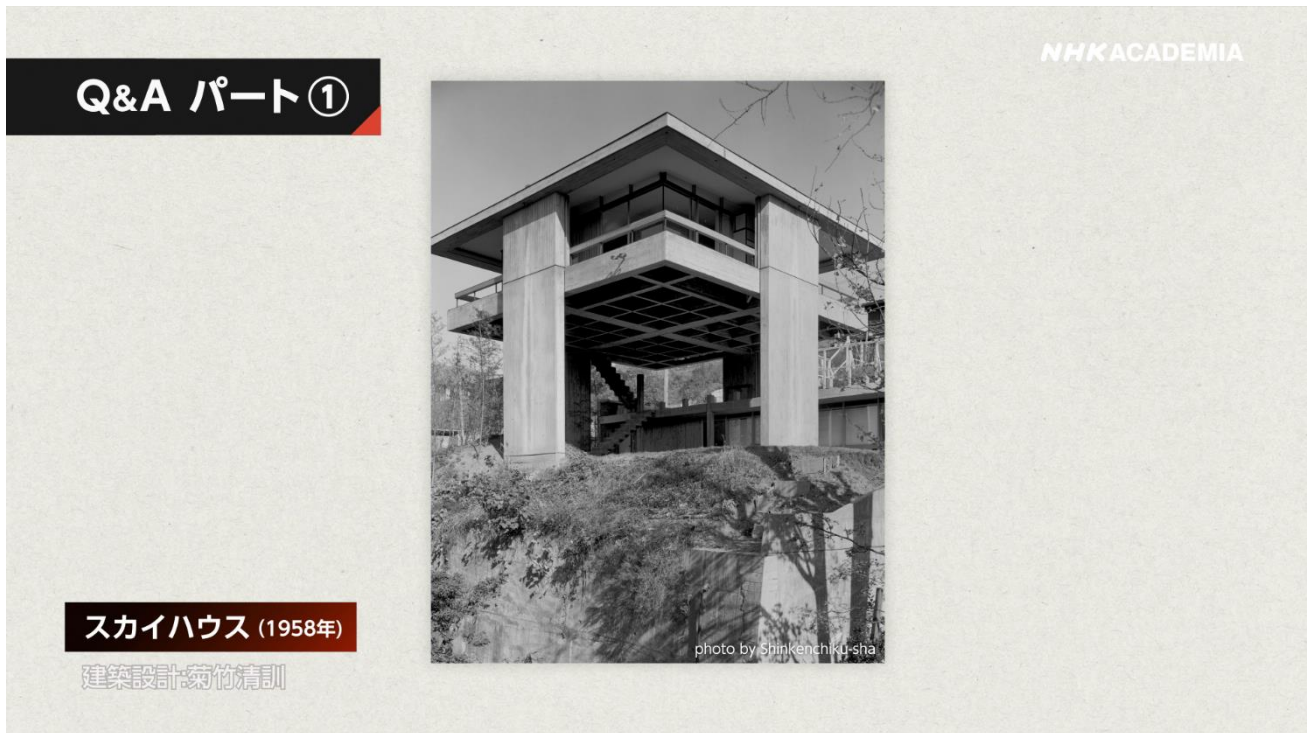


マコさん(東京)「今大学1年生で建築工学科に所属しております。4月から建築を学び始めたので、何から始めたらいいのかなと。妹島さんが学生時代、実際に何から勉強し始めたのか、お聞かせいただけたらうれしいです」

妹島さん「私も何をしたいかよく分からなかったんだけど、そのとき会った先生から『とにかく面白いと思うことを何でもいいからやりなさい』と言われて。当時は今みたいにいろんなメディアがあるわけではなかったので、紙媒体の雑誌で見て、これを見に行ったら面白いかなとか、こういうシンポジウムがあるとか、そういう外回りをうろうろすることは結構がむしゃらにやっていましたね。

自分が面白いと思うことをやっていくのは、とっつきとしてはいいんじゃないかなと思うんですが、そのあとちょっと反省したのが、学生時代はいちばんまとまった時間があるから、面白いと思うものだけ

ではなくて、よく分からないことでも少し辛抱してやっておくことが重要だったかなと。例えば、その当時はよく分からなかった歴史的な建物とか空間とかね、読んでよく分からない本でも投げ出さずに読み続けるとか…少しそういう辛抱もしながらやり続けるというのが、なかなか働き出すと時間がなくなってくるから、学生ときはそういうことにも時間を使ったらいいかなと思います」



マコさん「別のインタビューで、妹島さんが『建築は消去法で進んだ』というのをうかがったんですけども、消去法から本気に変わったきっかけは何だったんでしょうか」

妹島さん「高校受験のときはとにかく音楽のクラスにいたようなタイプでした。ただ理系のクラスにもいたんですね。進路を考えたときに、何学部何学部って考えていくとどれにも入れないし、何をやっていいか分からないとなったときに、工学部の中で建築学科というのがせめて近いかなと思いました。」

小さいときに両親が家をつくるというときに、ものすごく私も興味を持ったときがあったんですね。母がとっていた雑誌に載っていた菊竹清訓さんのスカイハウスを見て、『こんなものが家なのか』っていうすごい衝撃を受けた記憶にあって…でもそのあと忘れていたんです。大学に入って初めて図書館に行って本を見たとき、『はっ！これは私が子どものときに見た家だ』ということが分かりまして、そこからスイッチが入ってどんどん面白いと思うようになってのめり込んだんです」

Q&A パート①

犬島アートプロジェクト 岡山県

瀬戸内海に浮かぶ
全周4kmほどの小島
「犬島」

Inujima Project, Okayama, 2008~

アツキさん(石川)「日本や世界でこれからの建築に求められるものは何だろうなという疑問が最初に浮かんだのと、それに対して妹島さんご自身がどういうことを今行っているのかというのをお聞きしたいです」

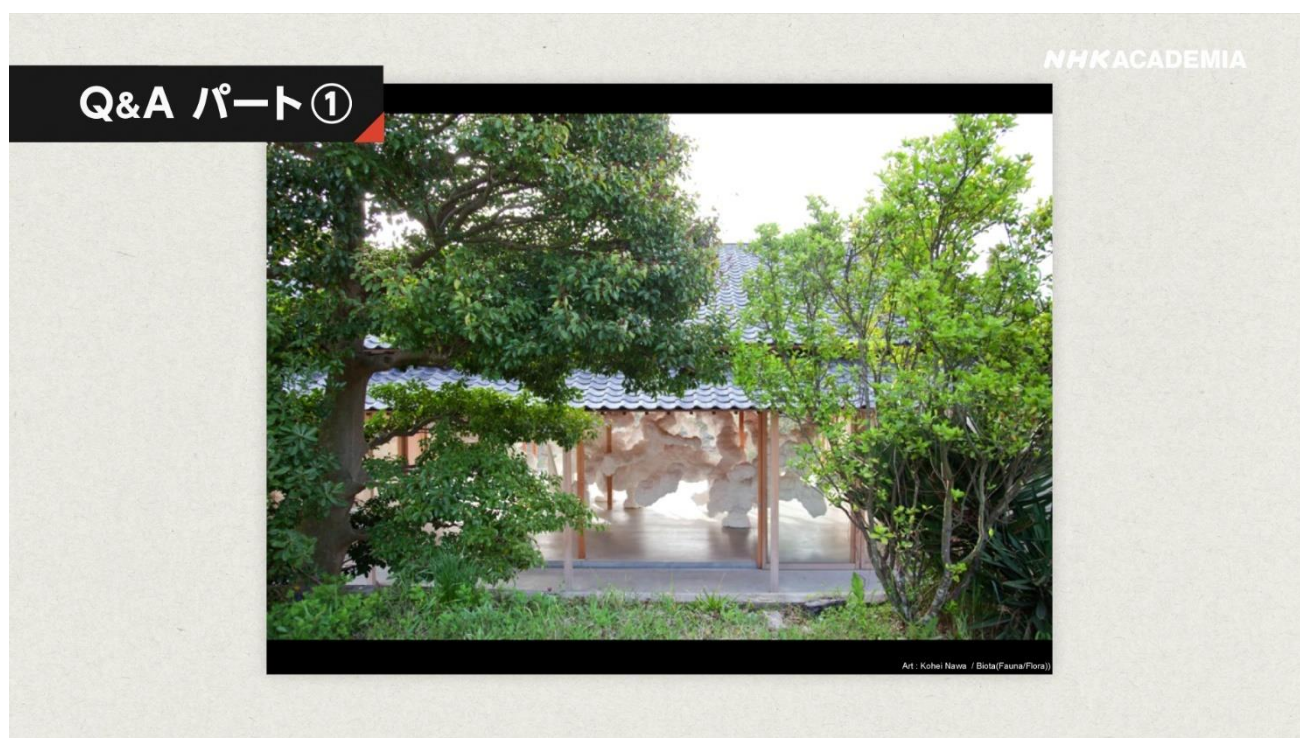
妹島さん「これは瀬戸内海にある『犬島』という小さな島で、直径が1kmぐらい、全周が4kmほどで、歩くと1時間もかからないで1周できてしまうような島です」

Q&A パート①

犬島アートプロジェクト 岡山県



妹島さん「私が『犬島アートプロジェクト』に関わり始めたのは2008年なんですけど、そのころは60名弱ぐらいの人が住んでいらっしゃいましたが、15年たって今は20人から30人ぐらいになっています。平均年齢も80歳弱ぐらいのような感じです。皆さん『直島』というのは結構お聞きかと思うんですけど、この小さな島が元気になるようなことをやりたいということで始まったもので、写真で赤い線が見えると思うんですけど、これが最初に始めた家のプロジェクトなんです。今ある民家を少しずつ改装していこうと。始めてみたら、『こんなことやっていい』ということがどんどん出てきて、ブルーの線があるんですけど、『1周できた方が島のいろんなことに触れられるな』とか、『島のランドスケープを発見できるな』というようなことにつながっています」



妹島さん「これが最初のころに出したアートです。民家をリノベーションして、ギャラリーにしてアートが入っています。

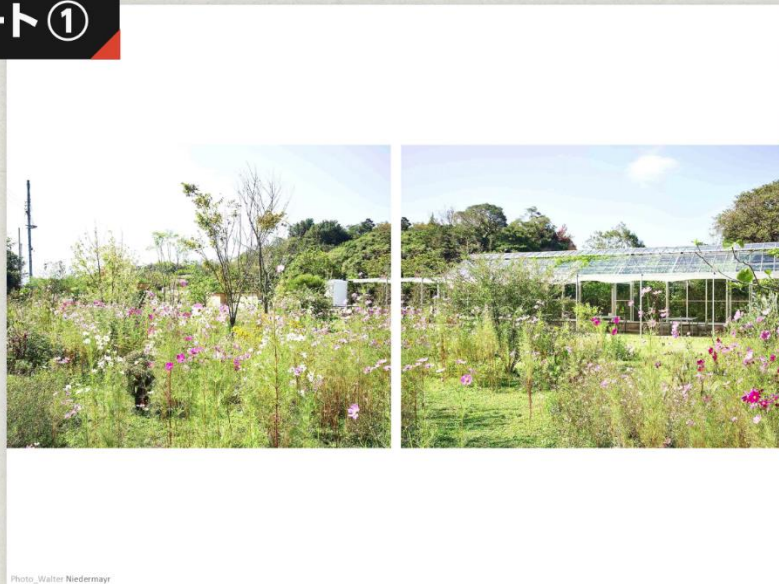
美術館といっても、こういう小さなものが点在していて、集落自体が美術館にも感じるし、見学に来てくれる人も登場人物として一緒に風景をつくっている。みんなでこの集落を美術館にしていくというようなことが起こりました」

Q&A パート①



妹島さん「そうしているうちに、ウィークエンドバーみたいなものがあつたら、また違った広がり生まれるんじゃないかということで、ここにみんなの休憩所みたいなものができました」

Q&A パート①



妹島さん「これは『くらしの植物園』といって、これからの暮らしをどういうふうに見えるかなということで、ここでいろんな実験的なことを始めて、排水システムを実験的にやる池をつくったり、みんなでピザづくりとか…そんなことも行われています。また学生たちが来て、大工さんと一緒にリノベーシ

ョンしたり、それからみんなで島を見て、島がどうなっているか、ランドスケープをどうやってつくったらいいかというのを考えたりね。

建築のプロジェクトというのは、『こういうことをつくろう』とか『こういうことが問題だから、こうしよう』とか…まず考えをつくって、それを実現して出来上がりというのが普通だったんだけど、ここでは『これをつくってみる…いやいやそれだったらどうしてこれをやらないの？これやった方がいいんじゃない？』と、自分たちでここをつくっていけるんじゃないかというように広がって行って、そこにみんなが参加してくれるようになりました。

風景というのは、人につくってもらうものではなくて、自分たちの暮らし方とか、どんな自然との付き合い方をしているかとか、自分たちがつくっていくものなんだということもこの経験で知りました。

これが世界や日本でどんなことが求められるかという答えになるかなんですけど、建築をつくることで、人々がまた環境をつくっていく。そういうふうな思いで何かつくっていけるようになりたいというのが今思っていることです」



チカさん(海外) 「私の状況と妹島さんの状況というのは、仕事の体制が少し似通ったところがあって、現在韓国で建築事務所をやっているんですけども、パートナーが男性で私より10歳上の方なんです。それで私の質問なんですが、建築家のパートナーとして一緒にご活躍されている西沢立衛さんと一緒にSANAAとして仕事をされているときに、これだけプロジェクトを長くやっていらっしゃる中で大変だったことを教えていただければと思います」

妹島さん「私たちは10歳違いですけど、私が10上ですね。広く考えればやっぱり似ているんでしょうけれども、集中して詰めて考えると相当タイプも違うから、『こんなことを考えるのか』というのがすごく面白かったですね。この金沢美術館なんかは結構初期ですね、一緒に応募して、もう一つ二つ招待されたりしてやって…でも初めはそんなに大きなものができると思っていなかったから続けなきゃいけないみたいなことで、最初のうちはぎくしゃくしながらやっていました」



妹島さん「一緒にやって面白いのは、ひとりだったら考えないようなことがどんどん広がりますよね。自分だったら、これがいいなと思ったらその部分に集中して考えていくと思うんですけど、全然違うところがあったりして、『ええっ!』というふうになるけれども『じゃあそういうことを考えてみようか』というような広がりがあって。私たちの場合はスタッフの方ともそんな感じでワアワア言いながらやります。初期のころは、相当けんかしていましたね。『もうこれはやめだ』とか言いながら。今は昔ほどけんかする体力がなくなってきたというところはあると思うんだけど、それでもスタッフの人とやるときに、だんだん一緒にできないときはばらばらに打ち合わせをしたりして…まあその方が広がりながらつくっていけるかなと思ってやっています」

チカさん「『けんか』という言葉が使われたんですけど、自分が譲れない部分とか、そういうのってやっぱりあると思うんですけども、そういうときは譲り合って、他の意見も聞いて、うまくまとめて…相当な忍耐力と時間を費やすと思うんです」

妹島さん「時間は無駄かもしれないな。でも私たちは二人だけじゃなくて、スタッフもいて、意見が違って、誰かがはっとするような模型を出せたり、言葉を出せたりしたら、確かにそれはちょっと考えてみ

たら面白いかもねっていうようなことになる。笑い話なんだけど、初期のころ、ある友人が夜中に来たら大げんかになっていて、事務所を挙げて多数決をとっていたのを見たって。コンペの締め切りが近いのに、私と西沢だけじゃなくてスタッフの意見も分かれて…そうやって侃々諤々(かんかんがくがく)しながら、なんとかまとめていっています」

エイトさん(福岡)「現在高校3年生で、将来の夢は建築家です。妹島さんは、これからどんな作品をつかっていきたいですか。また、これから地球を取り巻く環境に対しての建築のあり方というのは、どのように変わっていくと思いますか」

妹島さん「それは私もまた最近迷っているというか、特に地球環境の中でね、これは勉強が中途半端で言うのもあれだけど、何となくどんどん破壊していっているというか…そういうことでは問題だというんで、本当にそうなんだろうというふうに思っていたんですけど、エマヌエーレ・コッチャさん(イタリアの哲学者/1976年～)という人の本に書いてあって、私の勝手な理解だと、自分たちは大気に満たされて生きていられるんだけれども、呼吸すると私たちが大気をまた出して大気を耕しているんだっていうようなことが書かれていたんです。その人のそれを読むと、なるほど建築というのも環境をどちらかという破壊していて、なんとかもっと寄り添うやり方がないのかなと思ったんだけど、それだったらどうしたらいいのかなっていうのが、つい最近思っていることなんです。地形の一部というか環境のいろんな要素の一部になるようなものを、ここ何年かやっていたんですけど、一部になるんだけれども一回自分もそれをつくっていくとか耕していくとか、そういうこともやっぱりもう少し考えた方がいいのかなと、ここ半年ぐらい思っているところですね」

エイトさん「もう一ついいですか。妹島さんの作品には、多くのガラスが使われていると思うんですけど、そのガラスって自然光をとり入れたりとか、周りの景色を見せたりして、うまく周りの自然と溶け込むというように感じられたんですけど、設計とか構造とかを考える際にどのようなことを考えているのか教えて欲しいです」

妹島さん「ガラスは結構難しく、確かに透明だっていうことは大きいんだよね。この金沢の美術館でも、周りがガラスではなくて全部壁だったら、やっぱりガラスの方が周りとの関係があるっていうふうに言える。しかしフィックスだから、体はやっぱり感じる。透明なんだけど、ガラスで囲われているっていうのも感じる。だからその辺が、日比野さんのアサガオで囲まれたときは本当にすごく、日陰になってガラスの反射が消えちゃったもんだから、ここをうろうろ歩くと軒下を歩いているみたいな感じになったのね。瞬間的にガラスは分かりやすいところはあるけど、もう少し時間を入れていくと扉を開けましたとか、自分がぐるっと回っていろんな関わり方ができましたとか、いろんなことで周りとの関わりを持つということ是可以する。そのためには、今エイトさんがおっしゃったみたいに、素材でガラスだけじゃなくて構造をどんなふうにつくるかとか、どのように周りとの関係しながらつくったかとか、いろんなことから多様な透明な関係というのをつくることができるようになるんじゃないかと思っています」



まっさん さん(神奈川)「小学 5 年生で、今は伊東建築塾に通っています。僕からの質問なんですけど、今まででいちばんいい出来だと思った建物は？」

妹島さん「つくったときはね『これはいい。これはよくできた!』って思うんだけど、『こういうことも考えられたな』とか『もっとこんなことをしたらいいんだな』っていうようなことも教えられる。それからくどいんだけど、金沢の美術館みたいに、自分じゃなくて他の人がいろんな使い方をしていく…使うってものすごい創造的だよね。使い方で、いろんな空間だったり、いろんなことが起こったりしている。だからそういうことまで含めて、いろんな時間の中に入り込んでいけるような建物をつくることができたらいいなと思っています」

あいさん(秋田)「金沢 21 世紀美術館が開館した 2004 年から 18 年ぐらいがたっていて、街も少しずつ変化していると思うんですけど、美術館と地域との調和というのを考えたときに、今ならこの 21 世紀美術館をこう変えたいという点があったら教えていただきたいです」

妹島さん「これは難しい。まず私たちとしては、周りに開いて、スケールも落として、街に手を広げてというふうなつもりでつくったんですが、オープニングのときにアーティストの人が『宇宙船が飛んできた』っていう絵をつくりまして…それはアーティストの人は褒めことばでやってくれたらしいんだけど、私たちとしてはショックで、そんな突然のものが舞い降りたみたいに思われたんだなと思った。当然、何かできたら突然なところというのもあると思うし、だけどやっぱりどこかで着地していくところもあって、時間をかけて、そういうものをみんながつくっていったくれたなという思いがすごくありま

す。一方で今やるとしたら、もしかしたらもっと“ひさし”というか大きな屋根が周りにあったりして、ガラスの中に入らなくても、いろんな参加の仕方があるというふうな展開はあるかもしれない。まあ実際はそういうことになってみないと真剣に考えているわけではないんでね、今思うことを言いました」

あいさん「建築家の立場で加わるというよりかは、市民の方々も主体？」

妹島さん「建築家として“ひさし”みたいなものがバンと周りにあって、中に入らなくも一步入ったというのものもあるし、先ほどの地図みたいに、実際そこは美術館の敷地ではないけれど、どんどん展示室が周りがあると、美術館の中で疑似的な道とっていったようなものが、本当の道が美術館の延長の道になって展示室があったり、場合によっては展示室じゃないところを展示室みたいにすることができたり。

境界のことを私がいろいろ軽くしようとしたり、薄くしようとしたりって言っているけれど、可変的に大きな場所になったり、小さい場所になったり、そういうことが起こる。例えばこういう映像だって、これでも十分話はしているけれど、あと5年もしたら考えてもいなかったようなことが起こっている可能性もあるかなと思います」

ラクさん(海外)「アメリカのカリフォルニアで建築を学んでいます。近年、交流スペースや芸術的な建物というのが増えてきたという印象があるんですけども、そういった建物の中にはあまり落ち着かないようなスペースであったりとか、周りの景観とあまり調和していないなというふうに感じる建物もあつたりするように感じています。どのような建物の特徴が、私たちの快適さやコミュニケーションというのを生み出すのかということを知りたいなと思います」

妹島さん「それは建築家によって考え方が違うだろうし、場合によってはものすごく形が変だと思っても、街がまとまっていくような場合もあるし、変なだけで邪魔っていうものもあるから、なかなか難しいけれど、やっぱり私としては、どういうふうなことを考えてそれがつくられているのかっていうことが、ある程度分かるものだと、自分はそう思わないよとか自分はこう思うよっていうように関わりを持っていける。そういう関わりを持っていけるようなものの方がいいかなと思います。

変わっているというだけで、なんとも取りつく島もないものだと、さすがに交流しようと思ってもできないけれど、この金沢美術館はそういう意味では、つるんと丸くて、人を迎え入れると言いながら、片方で円盤が飛んできたみたいな形と最初に言われて…そういう唐突感がやっぱりあったんだけど、例えばさっきの展示室が四角くあつたら、それが飛んだんだねっていうふうに誰かが発見するとか、ここの展示室が全部かたまりになっていたら、どうやって中に入っているか分からないというのがあると思うんだけど、いろんなことから発展していけるというか関係が生まれてきて、いろんな人によってつくられていく建物っていうのがあるのかなという気はします」

ラクさん「素材とか見た目とかが快適さではなくて、その土地の歴史だったりとか、文化だったりとかに

着目されているんでしょうか」

妹島さん「でも素材なんかはやっぱり、その場所その場所の素材ってあるよね。さっきのエルサレムだって、壁の70%を同じ石にきなさいと言われてたら、建物をつくっているけど、建物で地形をつくっているような感じじゃない。その下にある土地と同じようにね。だからすごい計画だなっていうふうに思いますけどね」

ラクさん「ありがとうございます」

妹島さん「どうもありがとうございました」